

教職大学院 Newsletter No.172

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2023.06.17(公開版)

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2023 HYBRID (対面-Online) SUMMER SESSIONS 特集号

**実践し
省察する
コミュニティ**

*Round Tables:
Summer Sessions 2023
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

**実践研究 福井ラウンドテーブル
2023 Summer sessions**

17(sat) 9:00-17:40
18(sun) 8:20-14:00
福井大学総合研究棟V (教育系1号館)・総合研究棟I
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2023.6.17-18

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
後援 福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

内容

- 福井大学連合教職大学院のラウンドテーブルに寄せて (2)
- 全体スケジュール (4)
- Special Session**
- 教職大学院改革特別フォーラム (5)
- Zone A** 学校 (6)
- Zone B** 教師教育 (7)
- Zone C** コミュニティ (8)
- Zone D** International (9)
- Zone E** 探究 (10)
- Round Table Cross Sessions** (11)
- 実践し省察するコミュニティを結び支える (12)
- ラウンドテーブルの歩み (14)
- 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革 グローバルコミュニティへの誘い (16)
- アーカイブ (18)
- お知らせ (27)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2023年6月の開催をもって45回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド（対面-Online）にて SUMMER SESSIONS を開催いたします。6月17日（土）には、教職大学院改革特別フォーラム、5つのテーマに即した ZONE SESSIONS、6月18日（日）には小グループ（5-6名程度）で実践を丁寧に語り聴き合う ROUND TABLE CROSS SESSIONS を行います。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

【対面-オンライン(Zoom)のハイブリッド・セッションについて】

参加申込時の登録メールアドレス宛に以下の日程でご連絡差し上げます。

- (1) **6月16日(金)**: 6月17日(土)申込 ZONE ごとの Zoom URL をお知らせします。
- (2) **6月17日(土)**: 6月18日(日)ラウンドテーブルの Zoom URL をお知らせします。

*Zoom URL が未受信の場合には dpdtfukui@yahoo.co.jp 宛に所属・氏名を添えてご連絡ください。

*両日ともに Zoom ブレイクアウトルームの設定がございますので、できるだけ「Zoom 接続開始」時間までに Zoom ミーティングに入室してください。運営サポートにご協力をお願いします。

「聴く」「語る」を考える

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

半 原 芳 子

私がラウンドテーブルに参加し始めて、約 15 年が経ちました。初めて参加したラウンドテーブルは当時お茶の水女子大学で行われていたもので、その時はわけも分からず、ただ座って報告者の方の話を聞いていたことを思い出します。立場や年齢に関係なく学び合えること、そしてなにより人々が集いコミュニケーションをするラウンドテーブルの雰囲気が好きで、ただその場にいることを面白く感じ、参加を続けていました。しかし、ある時を境に、ラウンドテーブルへの参加の仕方が変わりました。それは、「聴き方」が深まったのを自覚した時でした。ラウンドテーブルでは、多くの実践報告に出逢います。報告を聴いていると、私(たち)はついあれこれ質問したくなります。また、報告者の表明する考えが、自分のものと異なっていたり、自身の信念や価値観とぶつかったりすると、(しばしば相手の話を遮って)意見を言いたくなってしまいます。しかし、そこを凌ぎながら相手の話にじっと耳を傾けていると、自分が質問したかったことが報告者自身の口から語られることや、自分が意見したかったことが報告者自身によって吟味されることがあります。また、これはラウンドテーブルに参加した多くの方が実感していることだと思いますが、報告者の実践の道りを聴いていると、「そうそう、私にも同じような経験があった」と自分の実践が思い起こされ、報告者の話を聴きながら、同時に自身の実践のふり返りが始まっていきます。そのような「聴く」実践に取り組めるようになってからは、ラウンドテーブルへの参加が能動的になり、今では実践研究福井ラウンドテーブル 2 日目の 100 分枠の報告も短いと思えるぐらいです。

「聴く」取り組みとあわせて、「聴いてもらう」経験もしています。私事ですが、つい最近、人生における大きな出来事を経験しました。それはドナルド・ショーンの言葉を借りれば「通常の期待を裏切る」、私にとっては「好ましくない」出来事でした。自分に起きたこの出来事をふり返ることは大切だと直感するものの、失敗したという気持ちや後悔の念が先行し、状況の認知も意思決定もできず佇んでいました。そうしたなか、同僚である仲間が時間をかけ、私の話を深く聴いてくれました。話しているうちに、「そういえばあの時こんな状況だったな」「ああ、自分はこんなことを大切に思っているんだ」「そうか、あのこととこのことがつながってくるのか」など、次第に自分で状況を捉えたり、意味を与えたり、原因やつながりを探ったりすることができるようになりました。そして、数か月経った今は、その前後の文脈を含めより長い時間展望のなかで、その出来事が再解釈できるようになり、希望が生まれ始めています。もし、あの時、誰かの判断が「与えられて」いたら、私は自分に起きたこの出来事についてここまで深く探究すること、もっと言えば、今の私はいなかったと思います。

ラウンドテーブルでは、その人の思いにもならない思いがことばにされたり、非常に重要な転機が打ち明けられたり、さらには起伏に満ちた人生が語られたりします。そこに立ち会う聴き手は、自身のこれまでの聞き方をふり返りながら、「聴く」実践に取り組む必要があると思います。また、報告する側も、普段の「プレゼンテーション」スタイルを手放しながら、聴き手を信頼し、思いにもならない思いをことばにしたり、自分にとって重要だと思う転機を語ったり、起伏に満ちた人生の道りをおおいに！語ったりしてほしいと思います。とはいえ、そうした「聴く」「語る」力、言い換えれば協働的に省察する力を培っていくのもまた時間がかかるものです。15 年前わけも分からずただ座っていた私が、はたして今どれほどの力がついているかと問われたら、甚だ自信がありません。しかしながら、私はラウンドテーブルで出逢った人々の「聴く」「語る」実践から、その力を培う勇気をいただけてきました。それが私にとって、ラウンドテーブルの一番の醍醐味かもしれません。

この 2 日間、私たち自身の手によって開かれるコミュニケーションの場で、みなさんお一人お一人が励まし励まされながら、歩みを進めていけますように。ようこそ、実践研究福井ラウンドテーブルへ。

実践研究

福井ラウンドテーブル

2023 Summer sessions

Round Table Cross Session in University of Fukui
since 2001

6/17(sat) 9:00-17:40 (zoom 接続開始 8:30)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 9:00-11:00

「新たな教師の学び」を支える協働のために
ー協働探究型研修の創造・展開への企図の現段階ー

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20ー大学生・社会人ー (Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10ー児童・生徒ー (Zoom 接続開始 12:50)

Session II 学校・教育・地域を考える 5つのアプローチ Zone Sessions 14:30-17:40

- A 学校:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
ー多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探るー
- B 教師教育:学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
- D International: International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究:学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたカタチをみんなで考(かん)がえる
ー学(まな)びと教(おし)えのあたらしいパートナーシップー

6/18(sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。

言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。

話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。

そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。

原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

7:50- 8:20 接続
8:20- 8:40 はじめに
8:40- 9:00 自己紹介
9:00-10:40 報告 I
10:40-11:40 報告 II
～ランチ・ブレイク～
12:20-14:00 報告 III

Special Session 教職大学院改革特別フォーラム 2023 年 6 月 17 日(土)9:00-11:00

オンライン(Zoom 使用)

「新たな教師の学び」を支える協働のために

協働探究型研修の創造・展開への企図の現段階

2022 年 12 月 19 日の中央教育審議会から出された『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)』では、「新たな教師の学びの姿」として、子供たちの学び(授業観・学習観)とともに教師自身の学び(研修観)も転換し、教師にも「主体的・対話的で深い学び」が求められることが改めて確認された。この研修観の転換に向けては、文科省で予算措置(令和 4 年度教員研修高度化推進支援事業)もなされるようになり、具体的な条件整備も進んでいる。

本フォーラムではこれまで、理論と実践の往還・融合、教員免許更新制廃止後の研修改革、教員養成フラッグシップ大学構想、学校における学び合うコミュニティの展開といった点から教師教育改革の展望を共有してきた中、今回は改めて行政研修の展開に注目したい。教師の主体的・対話的で深い学びを支えるために、どのような研修が求められるか。研修担当者の主体的・対話的で深い学びも促すために、どのようなネットワークが必要となるか。

教職員支援機構(NITS)では、令和 5 年度から年間を通した協働探究型の教員研修を開催し、各都道府県での教員研修とリンクする仕組みを開発している。また、福井県では 10 年以上前から、旧来の一斉伝達型の研修に代わる新たなモデルとして、受講者による協働探究をベースにした研修が、行政による悉皆の教員研修としても展開している。今回は行政による協働探究型研修の実例を共有しながら、「新たな教師の学び」を支える協働のあり方について新たな展望を探りたい。

趣旨説明

報告 1: 教職員支援機構における協働探究型研修への企図

独立行政法人 教職員支援機構 審議役/次世代型教職員研修開発センター長 佐野 壽則

報告 2: 教育委員会と大学との協働による教員研修の展開とそのネットワーク

福井県教育総合研究所 副所長(研究・研修) 木村 花栄

福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 森田 史生

コメント

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員免許・研修企画室長 檜原 哲哉

省察と展望

福井大学 理事(企画戦略担当)・副学長/総合教職開発本部長 松木 健一

〈コーディネーター〉

福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 遠藤 貴広

学校・教育・地域を考える 5 つのアプローチ

Zone A 学校 (対面・オンラインのハイブリッド開催)

21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う -多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る-

Zone A は、これまで「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げて、学校や園が持続・発展していくための授業改革・教師協働の在り方について考えてきました。加えて、多様な背景や困り感をもつ子どもを含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる教育の在り方についても議論を積み重ねてきました。子どもがあらひのままの自分でいられるように、教室や学校では、どのように取り組んでいくとよいのか、また教師が子どものよさに気づき、認め、丁寧に引き出していくためにどう取り組んできたか、などを共有してきました。子ども間、教師と子ども間、教師間の学習コミュニティの学びを深めていくためには、対話や協働の在り方を、もう一度見つめ直すことが重要であることが見えてきました。これらの視点は、教育・保育を考える上で極めて重要です。

前回 2023 Spring Sessions では、子どもが個性や能力を発揮し、学び合い育ち合う学校を実現するために、一人ひとりの子どもに寄り添っていくことについて、見つめなおしました。また、学校の当たり前を問い直し、教職員が協働していく組織をいかに構築していくのかについて考えました。そして、参加者の皆様とともに、子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師の対話や協働の質をいかに高めていくのかを検討してきました。

そこで、実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Summer Sessions では、「個別最適な学び」といわれるように、子どもたちが自分のよさを最大限に発揮し、それを認め合う学校を実現するためにはどうすればよいのか、「個」を生かすにはそこに「協働の学び」がどう関わってくるのか、それらを生み出すためには、どのように組織を捉え直していくのか、そこでのリアルや苦労なども含めて、参加者のみなさまと共に協働探究したいと思います。

Connection	14:00-14:30	オンライン接続
Orientation	14:30-14:40	オリエンテーション

対面会場 教育系 1 号館 2 階大 1 講義室

Session I	14:40-16:00	
Symposiums		「多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校づくり」
<シンポジウム>		<シンポジスト>

14:40-15:10	福井市清明小学校	校 長 坪川 修一郎
-------------	----------	------------

15:10-15:40	岐阜市立草潤中学校	教 諭 中今 純一
-------------	-----------	-----------

探究的な学習プロセスの中で、相互作用を通して子どもたちが学び合っていくストーリー、それを支える先生たちの組織・コミュニティについて話題提供を踏まえて考えていきます。

全体討議	15:40-16:00	
<コーディネーター>	福井大学連合教職大学院	小林 真由美
<休憩>	16:00-16:20	

Session II	16:20-17:40	Breakout Room 対面会場は当日ご案内します
Cross-session		Session I の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成

今日の学校教育においては、これからの変化の激しい時代の中で持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が大きな課題となっています。教師は主体的・継続的に学び、協働して力量を高めていながら、互恵的に学び合い高め合う組織づくりにも一層取り組んでいく必要があるなど、学校は大きな変革の中にあります。また、学校、地域、大学、自治体をつないだ広いコミュニティの中で子どもと教師が共に学び合う学校組織の新しい在り方が求められています。

Zone B「教師教育」では、教師の主体的・対話的で深い学びを目指した校内/園内を含む多様な研修や協働研究の在り方について、展望を拓いていきます。今回は、先進的に改革に取り組んでいる学校の変化などの多様な実践を共有し、校種を超えて学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成について共に考えていきたいと思ひます。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今回もオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

Poster Session

11:20-12:20	ポスターセッションⅠ	[対面・オンラインのハイブリッド開催]
13:10-14:10	ポスターセッションⅡ	[対面・オンラインのハイブリッド開催]

Session I

14:30-14:40	Zone B オープニング	[オンライン開催]
14:40-16:30	シンポジウム	
16:30-16:45	総括	

< 話題提供 >

福井県教育庁 義務教育課 課長	三崎 光昭
-----------------	-------

< 実践報告 >

福井市森田中学校 教諭	木下 慶之
福井県立丸岡高等学校 校長	山内 康司

< インタビュアー >

福井大学連合教職大学院 教授	中森 一郎
福井大学教育学部 助教	小林 溪太

< 総括 >

学習院大学 教授	秋田 喜代美
----------	--------

< 進行 >

福井大学附属義務教育学校 校長	
福井大学連合教職大学院 教授	牧田 秀昭

(敬称略)

自律的に学び続ける教師集団の校内研修の在り方について展望を拓いていきます。

Session II

16:55-17:40	フォーラム
-------------	-------

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の取組にどのように生かし、つなげることができるか、小グループで協議します。

Zone C コミュニティ(オンライン開催)

2023. 6 月趣旨文

持続可能なコミュニティをコーディネートする
～何が地域への誇りや愛着を支え、育むのか～

Zone C では、持続可能なコミュニティをコーディネートするというテーマで、地域の学習活動を支える公民館主事の方、地域の活性化に取り組んでいる方、そして地域と協働しながら教育活動を展開する教育関係者の方などが集いながら、シンポジウム等で対話を通じ、長く探究を続けてきました。

若者や外部の視点を取り入れ、地域を活性化させていこうという動きも報告されました。その後、地域と学校が連携し、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」の範囲を少しずつ大きくしながら、今はいろいろな地域の支え手(主事さんをはじめ、学校、地域住民など)が地域とどのように関わり、どのような取り組みをしているのかに焦点を当ててきています。

前回、高校生が仲間とともに、行政の支援も得て、若者の視点から地域の課題を探り、若者ならではの発想の実践を通して、若者の考えや行動力が地域の活性化に大きく結びつくことに気づきました。

また、公民館が中心となり、小中高生の考えを生かし共に活動する中で、主体的に参画できる地域活動を設定した事例が紹介され、若者の地域参画の大切さについても話し合うことができました。

Zone C では、今回は、地域企業が主体となって、学校と協働して地域の担い手づくりに取り組んでいるキャリア教育の実践や、地域に対する誇りを持ち、地域の伝統や文化を守り次の世代に伝えようと展開している実践の報告をいただきたいと考えております。

私たち自身が、それぞれの活動も振り返りながら、持続可能なコミュニティをコーディネートするために、取り組みを通して生まれた新たな出会いが、いかに地域への誇りや愛着を育て地域の担い手づくりを進めていくかを、対話を楽しみつつ探っていきたいと思います。

14:30～14:40	趣旨説明
14:40～16:05	Session I「キャリア教育を通じた Win Win Win の地域の担い手づくり」 川上 司氏(ふくい担い手づくりプロジェクト事務局) コーディネーター：後藤正邦
14:40～15:15	実践報告・質疑応答
15:15～15:45	小グループでの話し合い(自己紹介含む)
15:45～15:55	休憩
15:55～16:05	全体共有
16:05～17:15	Session II「勝山市北谷町の伝統と文化を継承・活性化する営み」 石井 孝幸氏(NPO 法人きただに村理事長) コーディネーター：天方和也
16:05～16:40	実践報告・質疑応答
16:40～17:05	小グループでの話し合い
17:05～17:15	休憩
17:15～17:40	全体共有と全体セッション～ふり振り返りと展望～ 全体ファシリテーター：富永良史

International Initiatives on Collaborative Learning: Teacher Education and Professional Development

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

Since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study. Moreover, since 2015 the University of Fukui has been accepting a large number of foreign students who were/are engaged in teacher education through collaborative learning and has been maintaining its ties with the past foreign students by inviting them to the Roundtable to share their previous and current practices with practitioners from different countries.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and “Roundtable”. In the symposium, the symposiasts will discuss the proposed approaches, results, and challenges in their contexts. In the “Roundtable”, educators from various countries will share their practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will stimulate you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated into Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。

2021 年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校との協働と連携して実施しています。加えて 2022 年 6 月からは、福井大学教職大学院で学び、帰国後授業研究に取り組んでいる実践の報告も行っています。そこでは、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。この Zone での事例紹介と議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることを期待しています。

なお、本セッションは英語での議論となりますが、[日-英の通訳を行います](#)ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用の Zoom に接続するためのデバイスを[別途](#)ご用意ください。

<i>Session I</i>	15:00-16:00	<i>Symposium</i>
<Symposiast>		1. Lesson Study in Myunguchi CDSS (Community Day Secondary School) Chanya Bertha, Science teacher of Myunguchi CDSS
		2. Professional Development in the Philippines, Michael Rosero, Executive Assistant of the Undersecretary for Curriculum and Teaching, Department of Education, Central Office
<Moderator>		TBD
<Commentator>		TBD
<i>Session II</i>	16:20-18:00	<i>Roundtable</i> Sharing and learning from each other's practices in small groups. The following guest speakers are placed in each group: TBD
<i>Closing</i>	18:00-18:10	TBD

福井ラウンドテーブル 2023 SUMMER SESSIONS

Zone E 探究 学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなで考える ～学びと教えのあたらしいパートナーシップ～

Zone E 探究では、「学びと教えのあたらしいすがたカタチ（ニューノーマル）」をテーマにして、子どもたち・若者たちと大人たちが世代を超えて探究します。

子どもたち・若者たちの遊び・学び・探究が学校から地域・世界へとひろがり、学校・教室内外の遊び・学び・探究の行き来がダイナミックにひろがる中で、これまでの子どもたち・若者たちと大人たちの関係、学びものと教えるものの関係が変わりつつあります。そこで、今回の Zone E では「学びと教えのあたらしいパートナーシップ」をテーマに、これからの学びのパートナーシップのあり方・あり様を、世代や立場をごちゃまぜでみんなで考えていきたいと思います。

1. 日程 2023年6月17日（土）

11:00-11:15	受付1 ☆
11:20-12:20	ポスターセッション1 ☆
12:25-13:00	受付2 ☆
13:10-14:10	ポスターセッション2 ☆
14:30-17:40	M・T・R
	ミートアップ MEET UP
	トークショー TALK SHOW
	ラウンドテーブル ROUND TABLE

2. 会場 対面：福井大学文京キャンパス

受付	教育系1号館1階ロビー
ポスターセッション	教育系1号館1階・2号館1号館1階の教室(予定)
M・T・R	総合研究棟113階 大会議室

オンライン：Zoom

☆ポスターセッションで、遊び・学び・探究・プロジェクトを発表して下さる子どもたち・若者たち・大人たちを募集しています。ご発表いただいた方には、福井大学大学院発行「発表認定書」をお贈りいたします。ポスターセッションの2つの時間の前後に、受付をおねがいします。



ZONE E 専用参加お申し込みはこちらから→

6/18(sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

【対面】		【オンライン】		ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。 グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。
		接続	7:50-8:20	
①はじめに	8:20-8:40	①はじめに	8:20-8:40	
②自己紹介	8:40-9:00	②自己紹介	8:40-9:00	
③報告Ⅰ	9:00-10:40	③報告Ⅰ	9:00-10:40	
④報告Ⅱ	10:40-11:40	④報告Ⅱ	10:40-11:40	
ランチ・ブレイク				
⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5 時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験を照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をとともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外に在るものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1 年、2 年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1 年、そして 2 年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめ

て浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実には動かしがたい。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をとともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探究と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探究できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてののみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこで語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 2009.3.31)

ラウンドテーブルの4重の意味

4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

I 長い実践の展開をとともに跡づけ、省察する。

Co-reflection in and on longitudinal process of practice

II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。

Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice

I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル

III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。

Cultivating Communities of Public and Reflective Learning

IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ

Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2023.3

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
- 2001.11.10-11 実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働(第 1 回)
For Reflective Practice、Professional Development、and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。(参加者 20 数名)京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む)(第 3 回)
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 4 回)
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第 5 回)
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第 6 回) 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第 7 回)
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海～2009)
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005(第 8 回 参加者 100 名超)
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 9 回)
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ (第 10 回)
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第 11 回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007(第 12 回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 13 回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 14 回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 15 回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回)稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009(第 17 回)5 つの領域:専門職として学び合うコミュニティ
(分野ごとのセッション始まる)
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後)鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010(第 19 回):学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える)門脇厚司・森透

2011.6.25-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2011(第 21 回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回)(名称を変更する)
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions(第 23 回) 参加者 450 名を超える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions(第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions(第 25 回) 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions(明治大学) 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions(第 27 回) 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
2015.2.27-3.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
2015.6.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions(第 29 回) 11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2016.2.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える 生徒ポスターセッションを開催
2016.6.24-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions(第 31 回)参加者総数 547 名 7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル) 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
2017.2.17-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える 特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催. 省察実践学会の発足
2017.6.23-25	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions(第 33 回)参加者総数 566 名 10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.15-21 マラウイラウンドテーブル 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2018.2.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions(第 34 回)参加者総数 627 名
2018.6.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions(第 35 回)参加者総数 476 名 10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.23 マラウイラウンドテーブル 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学) 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム

2019.2.15-17	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions(第 36 回)参加者総数 930 名
2019.6.21-23	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions(第 37 回)参加者総数 426 名
	9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マウイラウンドテーブル、
	11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、
	12.15 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
	2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
2020.2.15-16	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions(第 38 回)参加者総数 800 名程度
	3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
2020.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions(第 39 回)参加者総数 500 名程度
	11.21 東京サテライトラウンドテーブル
	11.21 関西ラウンドテーブル
2021.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions(第 40 回)参加者総数 550 名程度
2021.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 summer sessions(第 41 回)参加者総数 560 名程度
	11.13 東京サテライトラウンドテーブル
	11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021
2022.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 spring sessions(第 42 回)参加者総数 660 名程度
2022.6.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 summer sessions(第 43 回)参加者総数 640 名程度
	8.4 宮古島ラウンドテーブル
	11.26 東京サテライトラウンドテーブル
2023.2.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 spring sessions(第 44 回)参加者総数 660 名程度

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘いざない

ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院教授 木村優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実

現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の

人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代（Society5.0）、超AI時代、VUCA² ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れで

す。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めて

います。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交

流し、深めていく集団や組織のこと（ウエンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002）。

² 現代社会の特徴を表す4つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン, 2017）。



Archive –アーカイブ–

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions、2022 Summer Sessions に参加していただいた方の報告/振り返りを、Newsletter No.145(2021.05.10)と No. 151(2022.06.18)からご紹介いたします。なお、執筆者の所属は執筆当時のものになります。

[Newsletter No.145\(2021.05.10\)より](#)

学びを止めるな

勝山市立村岡小学校 北川 喜樹

令和2年度の教育を取り巻く情勢と言え、¹「コロナ」に尽きるだろう。昨年3月の突然の臨時休業に始まり、卒業式や入学式も簡略化や延期。6月の学校再開後も、例年の行事や大会等の多くが中止、もしくは規模縮小に。そして夏休み期間は本来の半分以上。誰もが経験したことのない事態である。しかし、学びを止めることなく、様々な工夫をしながら、多くの学校が今年度を駆け抜けてきたのではないだろうか。

そして今回のラウンドテーブル。学校再開から9ヵ月が経とうというこの2月、この場に集った先生方は特に、学びを止めることなく、工夫し続けてきた方々ばかりではないだろうか。

私が参加した Zone A では、「20世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」という大きなテーマのもと、「主体的・対話的で深い学びを実現していくための鍵は何なのか」について、それぞれの学校現場がどう向き合ってきたかを通して考えた。

まずは3人のシンポジストの先生方から、各学校での取組をご紹介いただいた。どの実践も大変興味深く、三者三様ではあるが質の高い実践事例が紹介され、「なるほどなあ」と納得することしきりであった。画面越しではあったが、学習コミュニティ構築の第一歩としては、やはり「ビジョンの共有」と「感情の共有」が大切だと再認識した。中でも加福校長先生の実践から、ここ教職大学院での学び方を学校にも

活用できる、という内容に大変興味を持った。教職大学院のカンファレンスでは時間をかけて先生方と対話しながら学んでいるが、意識しないと学校ではなかなかここまで語り合う機会は少ない。

本来、人と人との協力とは、自然に発生するものだろう。協力すればきつとうまくいく、という思いがあるから協力する。仲間と力を合わせて目的を成し遂げたい感情が湧き起こるから協力する。人が互いに協力し、協働することは何も特別なことではない。それなのに学校でも会社でも、協働することが大切だとか、協働するための仕組みを作れとか、そういう議論が起こる。もし、私たちの協働を妨げているものがあるとすれば、それは一体何なのだろうか。

ある人は、仲間と協働して仕事を進めたいが、忙しくて時間がないからできないと言う。またある人は、

学校内に仲間と協働して仕事を進める仕組みがないからやりにくいと言う。それもあるかもしれないが、果たしてそうだろうか。人は、本当にしたいと思えば、仮に時間や仕組みの障壁があったとしても、何とか乗り越えて前進しようとするものではないか。

結局、人は「したいからする」のだと思う。そう考えると、職場の仲間と「共有したビジョン」のもとで協働して何かに取り組むことで「感情の共有」が生まれ、それによって同僚性が高まり、さらに協働が進むという好ましいサイクルの実現が学びを実践する教師コミュニティへの第一歩だと感じる。そして私たち教員自身が「主体的・対話的で深い学び」を体現しながら学び続けることが、子供たちをその状態に誘う大前提なのではないか、Zone Aでの学びを終えた今、改めてそう感じている。

子どもの対話、おとなの対話

高浜町立保育所 後 拓真

ラウンドテーブルに参加させていただいたのは今回で何回目になるだろうか。今回はコロナ禍の影響でzoomでの参加になり、いつもと違った環境からの参加でそわそわしてしまう。ラウンドテーブルには、我が高浜町立保育所において「子どもの主体性」を求めている保育実践を試みはじめた平成27年度の回から参加させてもらっている。私自身、この保育実践の研究グループのメンバーとしてラウンドテーブルに参加し、発表者としても、話し合いのメンバーとしても、出席回数を重ねてきた。毎回、様々な職種の方のお話を聞いたり、自分達の保育実践の話をしたりすることで良い刺激を受け、「ああ、今年も参加できてよかった」と、同じ研究グループのメンバーと話しながら帰路につくのが毎年2月の恒例行事となっていた。

私達保育実践研究グループは、町内公立4保育所から数名ずつ集まって、日々の保育について考え、研

究し、まとめを行っている。今回のラウンドテーブルのような研修にも積極的に参加している。各保育所の代表者として、貴重な経験をさせてもらっているとありがたく思う反面、この経験を保育所に持ちかえり、他の職員と共有するという役割も重く感じている。実際、保育実践の研究に参加している者と、その他の職員との間に、隔たりを感じることもある（無論、全員が全員、というわけではないことを書き留めておく）。それは、保育への熱心さや技量といったものではない。しかし、形容し難い、何か。保育実践のまとめに向けての、「理解のなさ」というか、どこか“他人事”と思われている、と感じるのだ。自分自身の発信力のなさも十分心得てはいる。しかし町立保育所として、職員全員でステップアップしていくことを目指してこそその保育実践研究である。何か手はないものかと、研究メンバーみんなで頭をひねっていたものである。

そこへ舞い込んできた、今回のラウンドテーブルの概要。片道2時間のハードルを一気に取っ払ってくれた zoom。保育所のパソコンでなら、みんなも参加できるではないか。私の名前でエントリーしたが、そのカメラの画角の外からは、約20名の職員が発表を視聴していた。傍らに用意したホワイトボードには、みんなの感想や疑問が次々埋まっていく。ありがたいことに、代表で話す私のカンニングペーパーをみんなで作成することで、みんなが意識を持って参加できていると感じた。後日、参加してくれた職員に話を聞いてみると、「今まで参加するきっかけがなかったが、話が聞けて良かった。ラウンドテーブルってこういうのなんだとはじめて知った。実践研究グループのみんなはあんな風に参加しているんですね。」と率直な感想が返ってきた。

そして、今回のラウンドテーブルの内容においても、職員みんなが参加できてよかったと思える金言

があった。“対話”こそが私達に足りなかったのだと、気付かされたのである。発表のなかには、子ども同士の対話、おとな同士の対話、それぞれの大切さが織り交ぜられていた。職員同士の対話の重要性について、各々が日々の自分の姿を思い返しながら発表を聞いていたことだろう。ホワイトボードにも“対話”の言葉が並ぶ。みんなも対話が大切であることはわかっているながらも、それが十分にできていなかったと感じていたのだろう。今回のラウンドテーブルにみんなが参加できたことで、同じ問題意識、いや、解決の糸口を共有できたのではないかな。

毎回ラウンドテーブルに参加した後の、「参加してよかった」という思いが、今回は多くの職員で共有することができ、その後の“対話”のなかにも、小さいながらも花が咲いていた。今後も職員同士の対話を大切にして、保育に還元していけるようにしていきたい。

働き方改革と学び合う学校づくり ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 中川 美津恵

コロナ禍に立ち向かい、教育界では様々な試行錯誤を経てオンラインと対面を併用し教育活動を推進するなど、成果を上げています。長期間にわたる休校後、再開された学校現場では授業時数の確保に悩みながらも、体育祭や修学旅行などの行事で3密回避、マスク着用に努め、子どもたちや教職員、関係者が話し合い、創意工夫を重ね、協働的で感動をもたらす体験活動に結実させてきたように思います。特に子どもたちが活動の当事者となり、企画し実施していく過程の中で人間関係を形成し主体性、自主性を示したのは目を見張りました。そして、その子どもたちを支えてきたのは教師であり、改めて教師教育の重要性に思いが募ってまいります。

Zone B「教師教育」のテーマは「働き方改革と学び合う学校づくり」。予測困難な時代に社会の担い手となる子どもたちの資質能力を育むため、教師が協働して教育の質的向上を図ることを働き方改革と両立させながら取り組もうという難問です。

提案する話題や報告について、企画段階では ①学校現場と行政の双方の立場・視点 ②県内外の多様な実践 ③異校種(幼小中高)の実践 ④マネジメントの視点、というような観点で検討を進め、当日は最高のメンバーをお迎えしての開催となりました。

まずは県教育庁 星教育政策課長(文部科学省から出向)による話題提供。コロナ時代に現場で目指すICTの活用や働き方改革に向けて具体策が紹介され、明日からの心強い指針となりました。

最初の実践報告は長野県諏訪市立高島小学校小川研究主任による「白紙単元学習」の取組について。子どもが自己更新していく過程を丁寧に見取り、教師も省察を基に構想を編み直すという動的な授業は極めて質の高いものと感じました。

2番目は福井市森田中学校高間教頭による報告。現状分析に基づき皆で課題を共有しながら学校改革を進め、自身は得意分野を活かして先生方を支援するなど、学び合う実践コミュニティを作り上げていく過程が具体的に熱く語られました。挑戦する勇気とパワーをいただいたように思います。

3番目は福井県立藤島高等学校松田校長による報告。21世紀のリーダー育成に向けてSSH事業を柱に、働き方改革の視点で学び続ける教員コミュニティを支援し、次世代を見据えたカリキュラムマネジメ

ントに教職員一丸となって取り組む様子がよく伝わってきました。

最後に本学大学院寺岡客員教授がZone Bについての確に要点をまとめてくださったので、次の小グループでの話し合いにうまくつながりました。

続くグループセッションでは話題提供、実践報告を受けて、各自の職場でどう活かすか、学校の実情、学校が抱える悩みや課題を率直に語り合い聴き合っ、協働で探究する充実した時間を共有できたと思います。

当日は周到な準備と粘り強いマネジメント力のおかげで運営もスムーズに進行し、Zoomも順調で、有意義な時間を持つことが出来ました。ひとえに本部詰めのスタッフの力に負うところが大きいと感謝する次第です。

ラウンドテーブルを終えて

福井市足羽第一中学校 宮口 正樹

子どもの主体的な学びを実現するための授業改善が進む中、学校現場では業務改善や教員の働き方改革が喫緊の課題にもなっている。私が参加した「ZONE B 教師教育：働き方改革と学び合う学校づくり」では、自分たちの目指すところ、そして直面する課題の両面を捉えたテーマが設定されていた。

まずは、福井県教育庁教育政策課長の星匡哉先生から話題提供をしていただいた。県のマネジメント研修や教職大学院で学びを進めてきた私自身、働き方改革は待ったなしと捉えている。ただ、それを推進する際、定時退庁や部活動休養日の設定などだけにとらわれてはいけないことを学んだ。長時間勤務になるタイプ、それを改善するタイプ別の取組、個人レベルでなく組織で行うべき取組など、そこにはデータに裏付けされた確かな科学的知見があった。その知見のあるマネジメント層と、自身の狭い経験や古

い認識だけのマネジメント層では、組織に与える影響には大きな違いがある。先生方の「自分の働き方は、自分で決める。」ことを支援し、組織として生き生きとした協働を進めていくためにも、マネジメント層が学び続けることの大切さを改めて捉えることができた。

次に、諏訪市立高島小の小川先生、福井市森田中の高間教頭先生、福井県立藤島高校の松田校長先生から、各校での実践報告をしていただいた。高島小では「白紙単元学習」として、子どもの主体的な学びの中で、子どもと教師が学び合っていくコミュニティの姿があった。森田中では、16時半退勤や4人グループでの授業研究など、働き方改革と教育の質の向上の両面が実践されていた。藤島高校では、教員のコミュニティを形成・持続しながら、学習観や授業観の転換が実践されていた。実践報告に対する講評として

寺岡先生からは、学校現場で、日々働き方改革と教育の質の向上という2つの課題に直面している私たちに、今一度何を捉え、どのようにチャレンジしていくべきなのかを示唆していただいた。

今回のラウンドテーブルもオンラインでの開催となり、直接先生方と語り合いができない残念さはあったが、それ以上の学びや気づきを得ることができた。私は働き方改革の推進派である。ただ、それをやみくもに進めるのではなく科学的知見、先生方のタイプ、適切な方策などを編みこんでいくことで、働き

やすい職場環境ができ、本当の意味での「子どものために」働くことができると学んだ。また、各校で子どもの主体的な学びへのチャレンジが進められていることも分かった。私の勤務する学校でも、それに負けない学びを進めていかなければならないと痛感した。

私の実践研究報告のタイトル「学び続ける意味」を今回も体感できたラウンドテーブルであった。コロナ禍の中、今回のラウンドテーブルを開催していただいた先生方に感謝し、感想としたい。

息吹くコミュニティ、静かに滾る Zone C

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 水野 幸郎

コロナ禍、いろいろなコミュニティで普通にしてきたことができない状況が続いている。

Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマのもと、公民館や学校などを中心とするコミュニティの活動を振り返り、その物語からの気づきを共有し学び合ってきた。

2020 年 4 月、緊急事態宣言が発出され、すべての活動が一時的に停止した。混乱が続く中、6 月のラウンドテーブルでは、「コロナ禍状況におけるコミュニティの学びの展望を拓く」というサブタイトルのもと、何かできることはないかと意見を交わした。

福井県では感染症対策が功を奏し、県内の公民館などの活動が工夫して実施されている。それらの新聞記事を、天方先生がスライドや趣旨説明で紹介することでコミュニティの活動が持続されていることを確認することから 2 月ラウンドテーブルは始まった。

こうした状況を踏まえて、今回は「コロナ禍において学びをつなぐ」ことをテーマとした。セッション I では、福井市春山地区、岡保地区の活動について話題を提供していただいた。

春山公民館主事、谷口舞衣子さんに、担当する昨年から地区で始まった成人式のイベントを、感染対策など工夫することで継続することに決定し、実施したことを報告していただいた。協力者を集め、リモートで開催する企画は準備に苦労があったが、当日大雪であったこともあり、かえってリモートが功を奏し成功に導くことができたことを、コーディネーターとの和やかな対話により伝えていただいた。大変さも感じられたが、行事をつないでいこうという熱意と高揚感が伝わり、ウィンドウ越しにも温かなものが感じられた。

岡保公民館運営審議会委員長、天谷弘之さんは、コロナによりこれまで続けて来た行事について実施するかどうかも含めてそのアイデンティティーまで検討することになったことを話された。今まで 20 年以上にわたって地域のために、体育施設を活用した東山アクアスロン大会や地元のコシヒカリと湧き水による日本酒造りなどを立ち上げ継続されてきた。引っ張り続けて、ふと立ち止まる機会を得たとき後継者問題にぶつかったことや、意識の変化や事業をこなすことが目的となり負担感が増した行事を、やめるという選択もあるのではと悩んだことなどをたん

たとと話された。ギャラリービューのみなさんが息をのんで聞いているのが伝わってきた。

夏の講習で「コミュニティ・オブ・プラクティス」を熱心に読み込まれていた主事さんたちには、本に書かれているコミュニティの成熟、維持・向上、変容を目の当たりにした気持ちだったのではないかと想像する。ここ何十年間にわたって、親密で安心して過ごせるコミュニティが崩壊し続けている。コロナ禍、本当に親しい人たちとのコミュニティさえも維持できなくなるという現実と直面して、乗り越えようとする意思がお二人の話に感じられた。

二つの報告を踏まえて、グループと全体での協議が、気を引き締めつつ和やかに進んだ。ファシリテータの要請により県外の何人かに、グループ協議の様子を話していただき、全体で共有した。私のグループにも神奈川の大学の先生がおられて、1年を通してリモートでの講義を余儀なくされたという話をされた。デジタルだけでは限界でハガキを通じたやり取りで、ぬくもりを伝え合ったということでした。オンラインだけではぬくもりのある親密なコミュニティは形成できず、オフラインの交流が必要なのだと痛感した。

セッションⅡでは、福井大学教育学部の3年生、白越充、大畑颯人、山登信真さんたちが「探求ネットワ

ーク」の取り組みについて話題を提供してくれた。この活動は学校が週5日制となり子どもたちの土曜日の居場所が必要になったことなどから、1995年にスタートした。大学生と子どもたちが、「もぐもぐブロック」「ひらめき☆理科ブロック」など9つのブロックに分かれてプロジェクトに取り組んできた。今年度は、自粛期間をすぎてオンラインで活動を始めたが、どうしても対面で子どもたちと調理や理科実験などの活動をしたいといろいろな調整や準備を重ねて、日常を取り戻そうとコロナ対策を徹底するなどの奮闘が語られた。子どもたちのために信頼と親密さを体験できるコミュニティの創造の物語は聞いているすべてのものに、希望を感じさせてくれるものだった。

この活動を通じて、原則全員参加の新1年生が同級生や先輩との交流が実現し、新しい小さなコミュニティの形成にも貢献していることが伝わってきた。全国では、リモートのみで鬱々とした状態が続いた大学一年生が多い中、福井大学では探求ネットワークの活動を通じて、出会い、つながり合い、自分の居場所として安心できるコミュニティが形成されている様子が共有された。若い人たちのエネルギーに触れ、あらためてコミュニティの意義と意味を教わった気がする。

[Newsletter No.151\(2022.06.18\)より](#)

持続可能なコミュニティづくりのために

美浜町立美浜東小学校 大野 靖幸

今回、ラウンドテーブル 2021 SUMMER SESSIONS の Zone C「持続可能なコミュニティをコーディネートする」に参加した。今回、ラウンドテーブルに参加するのは、三回目になるが、これまでも、職種や校種の枠を離れ、そこでは、多様な考え方や意見を聞くこと

ができるので、普段の合同カンファレンス以上の楽しみがあった。

セッション1では、福井大学国際地域学部の話提供があった。その中で特に印象に残っているのは、過疎化の背景には、4つの空洞化(①人の空洞化②土地の空洞化③むらの空洞化④誇りの空洞化)がある

と言うことだ。特に4つ目の空洞化は、住民が、そこに住む意義や誇りを失いつつある状態で、心の過疎と言われている状態であり、一度そのような状態になってしまうとなかなか活性化を図ることは困難になっていくのだという。自分が住んでいる美浜町も、消滅可能性都市に指定されている中で、誇りの空洞化に陥っている部分があると再認識させられた。「自分の生まれ育ったところに興味関心がない」「自分の住んでいるところに誇りがもてない」若者だけでなく、長い歴史を創り上げてきた年配層にも、地域活性化へのあきらめ感が否めない場所になりつつある。そのような現状の中、大学生がPBL活動を通じて、地域活動に参画し、地域住民とともに活性化のお手伝いをするというものであった。誇りの空洞化が進む中で、地域の中だけで、活性化策を掲げ、それを推進していくだけのエネルギーは、もうどの集落にもないと考えたときに、弱りつつある地域コミュニティにエネルギーがある大学生やNPOなどが参画していくことは今後非常に大きな意味をもつと感じた。美浜町も『新たなつながりを築く交流の拡大』を美浜創生総合戦略の中に位置づけ「関係人口」の増加を図ろうとしている。地域と行政が一体となって、新たな関係づくりを構築しながら、新しい町づくりを進めていくことが重要だと感じた。

また、セッション2の葛塚中学校の取組では、持続可能なコミュニティ作りで大切なことは、そのコミュニティに「おもしろさ」があるかという点だということに共感した。「今まで誰もやったことがないことを地域の方とともに作り上げていくPBLだからこその価値がある」まさにおもしろさは持続可能なコミュニティを構築する上では、必須なことだと感じた。前年踏襲している活動では、子どもに感動体験は与えられない。そういった視点をもちながらPBLを作り上げていくことの重要性を痛感した。

今回、Zone Cに参加させていただいて、前回のラウンドテーブルと同様に大きな「学び」を得ることができた。消滅可能性都市にある小学校に勤務する自分にできることは、町と行政と関係人口との関わりの中に小学生のコミュニティを持続可能な形で参画させることである。それは、現在進めている三校合同での総合的な学習の時間でのふるさと学習を中心としたPBLである。子どもには、4つの空洞化を止める可能性が十分にある。それぞれのコミュニティを融合させるのが教師の務めであると考え、子ども目線の活動を今後も進めていきたい。

今回、実践報告をしていただいた方々、本当にありがとうございました。

多様な先生たちと共に学び続けるコミュニティを培う

長野県岡谷市立川岸小学校 久保田 美千代

学校長から「ミドルリーダー養成コース」で受験するよう言われ、学び始めて1年が過ぎた。思い返せば、教職大学院で学び始める前から市の「中堅職員研修」に参加するよう声をかけられ、市内全教職員が集まる夏期休業中の悉皆研修ではファシリテーターに指名されるようになった。自信も経験も知識も熱い思いもないのに研究主任を任されるようになった。いつからか、自分の意志ややる気のようなものとは関係なく、「中堅」「ミドルリーダー」という立場に立たされていた感覚がある。「立場が人を作る」とい

う言葉を聞いたことがある。私は立場を与えられ、次第に自分の考えや想いを強く持つようになり、校内に自分の考えを発信することも増えていった。教職大学院での学びが少しずつ自信にもなり、発信することの後押しをしてくれているようにも思う。今年度は20代の若い職員が増え、若手の先生の授業や学級経営を見ながら「私だったら、もっと違う授業展開を考える」「あの子への支援は、もっと別の方法が良いのでは」と考え、「あの先生が自分の至らなさに気づくために何て声をかけようか」「なんとかして自分

の経験や学んだことを伝えてあげなくては」と、勝手に一人で悩む日が増えていった。研究主任なんだから、ミドルリーダーなんだから若手を育ててあげなくてはならないのだ。そのためには自分の実践や考えを伝えていかなくては。誰に言われた訳でもないが、私はいつの間にかそんな考えをしていたように思う。無意識のうちに私は傲慢でトップダウン的なミドルリーダーの思考に陥りつつあったのだと恥ずかしく思った。私がこのようなことに気づくことができたのは、二日間のラウンドテーブルのおかげである。

私はZone A1/A2に参加した。Cross sessionで同じグループになったストレートマスターの学生はインターン先の学校で周りの先生から言われた「子どもと同じように先生も見なくちゃダメだ」という言葉から考えたことを語ってくれた。彼女がその一言から深く思考し、自分のあり方を見つめ直していることを聞きながら「若手は未熟で私が何かを教えてあげなくてはならない存在」と捉えていた自分を恥ずかしく思った。若手の先生こそ、私以上に悩み考え子どもに接しているのだろう。そして、私自身が子どもと先生を別物として捉え、「子どもは自ら成長する力をもっている存在」「若手職員は、経験のある職員が教え、育ててあげなくてはならない存在」と接していたことに気づいた。私は子どものことは待てるつ

もりである。その子が「考えたい」と思えるようにタネをまき、授業形態を工夫する。しかし、先生のこととなると、待てない自分がいた。私は授業で見せた子どもの姿を伝えながら、その子への支援を担当の先生と考え合っていたつもりであった。しかし、担任からはっきりとした考えが聞けない場合に、自分の考えを一方的に伝えていたように思う。答えを出すことを急いでいたのかもしれない。経験の浅い担任の先生がその子への支援方法を考える時間を待つことをしていなかった。担任自身が考えられるような言葉をかけていなかったようにも思う。シンポジウムでは小浜市教育委員会の小坂恵先生が、支援会議では担任が能動的に考え、素直に話せる空気づくりに取り組んでこられたことを話してくださった。担任がマイナス感情を出し合えることを大切に、「聞いて聞いて問いかける」ことを意識してきたという。この言葉が自分に突き刺さった。自分の考えや経験を伝えるだけのミドルリーダーではなく、多様な先生方と共に考え悩み成長していく、そんな伴走者としてのミドルリーダーでありたいと思った。ミドルリーダーにはいろいろな側面が必要とされるのであろう。リーダーでありコーディネーターであり伴走者でもある。その時々によどのような役割を果たせばよいのか、その見極めが必要なのかもしれない。大切なことに気づくことができた二日間であった。

Round Table Report

小浜市立小浜第二中学校 Tjipto, William

The Round Table in June was a two-day affair with the first day broken down into various Zones, each with a different focus and discussion topics. On the second day, I was set to make a presentation about my first year at Fukui University. Although differing in content, I learned greatly from various aspects of each day.

For the first day, I was intrigued about the Zone A group, which was about inclusive schools and helping special needs or a range of different students. The need for inclusion and taking special note of students of all needs are more important than ever before, requiring unique skills and empathetic awareness in the teachers. While my job as an ALT teaching English often doesn't coincide with some of

these students' goals, the chance to interact with a foreign person may be a rare opportunity for them. My school also has some special needs classes which I usually attend so I have a little bit of experience in the area. Since I also joined other zones prior, I felt that maybe I could learn more about educating a wide range of student abilities and needs.

There were three speakers in the main room and each discussed different aspects and experiences in teaching. I personally found the first speaker, Matsumoto-sensei from Nagano, quite informative. Her presentation focused on the connections between her students and nature, bringing living things into the classroom and interactions with the school's pet goat. Her topic was very in-depth and I got some interesting hints for my practice. In particular, she referenced an "H-kun," and his growth through her practice. He first started off negatively, but soon through help from the teacher, was able to grow into a project leader. This progression was impressive and led me to think about the importance of focusing on the growth mindset for my own students.

After the three presentations, we split into Breakout Rooms for our discussions. I realized that Zone A was deeply challenging for me because I had to think a lot more about an aspect of teaching I was not fully familiar with, but it was an excellent experience for me. The teachers in the group were extremely supportive of my comments and were very helpful in assisting me to understand some of the more interesting points. The discussion was lively and a major theme of the discussion afterwards focused on students' feelings and growth is an important aspect to understanding how effective teaching is.

For Day 2, I prepared a presentation about my practice and thought about my immediate plans for this year as a second grade student. Knowing I will join the English group for the presentation, I was able to think about my practice a bit more deeply in preparation. I was the first to make a presentation to the group of global teachers. I was a little worried knowing that almost all the participants were from outside Japan, therefore I made sure to include a bit more information that Japanese teachers would otherwise already know. Learning a bit from my first presentation in February, I also talked more about the readings in summer that had a great influence on me and about how that applied to my project at the end of my first year. This way, my project and plans were more the focus of my discussions. While it felt long, I certainly didn't feel like I talked for a whole hour.

Afterwards, there was a bit of feedback and questions from the other members. I was glad to see responsiveness from some members about my presentation which made me feel there was more useful information conveyed this time than prior. My presentation and discussions this time were much smoother and had more relevant information for the listeners and as a result of focusing on fewer things more deeply. I felt that I was able to share more of my practice with them, hopefully adding to everyone's collaborative learning. I felt in some ways I could interact and add my opinions during both days more than in previous meetings, despite the Zone A topics and my long presentation being quite challenging for me. And through the Round Table, I felt that I was able to learn a lot and reflect upon my practice.



お知らせ

福井大学は、令和4年3月9日に文部科学大臣より教員養成フラッグシップ大学の指定を受けました。本学は、指定大学の中で唯一の総合大学であり、教員養成を変革する牽引役として期待されています。現在、独立行政法人教職員支援機構（NITS）と協働して教員研修の高度化に取り組んでいます。

より良い園・学校教育、社会を共に創っていくために、福井大学連合教職大学院での協働の実践と研究にぜひ参画していただけることを願っております。

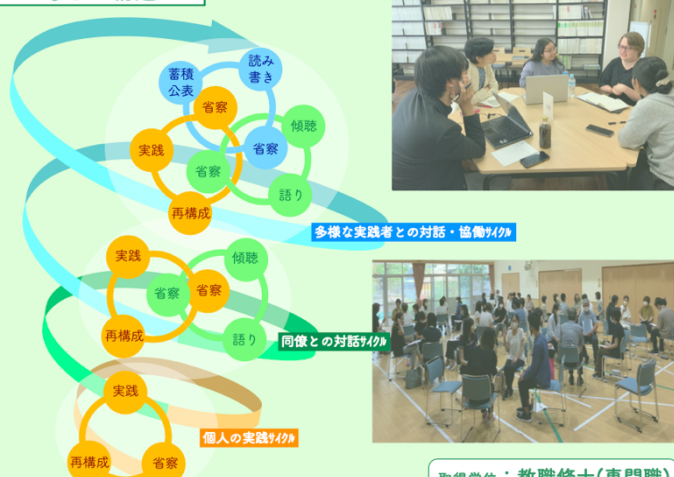
福井大学連合教職大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科

学生募集

次の時代は、学び続ける教師

多様な他者との対話や協働を通じた
実践と理論の往還の中で専門性を高めます

教職大学院における
学びの構造



取得学位：教職修士(専門職)
免許状：専修免許

※事前プログラム受講者は1年間での修了も可能です。(1年履修、特別支援免許専修については、別途連絡下さい)

まずは気軽に相談を！
関心のある方は、
教職大学院アドレス
dpdtfukui@yahoo.co.jp
までご連絡願います

福井大学連合教職大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科

学生募集

教職大学院 Q&A



よくある皆さんの疑問にお答えします！

福井大学連合
教職大学院の
情報はこちら

★教職大学院ではどのように学びを深め力を培っていくのですか？

授業実践の改善に向けて、各勤務園・校で子どもたちの学びへの深い見取りに基づいた授業/保育実践・研究、学校/園組織マネジメントといった自分が設定するテーマに取り組みます。皆様の実践現場をもとに教職に必要な力量・専門性を培います。座学中心のカリキュラムではなく、学校拠点方式の学びを大切にしています。

下記の通り、月間カンファレンス、ラウンドテーブル、集中講座といった教職大学院のカリキュラムの中で、異校種の先生方との対話を通して自分の実践を問い直します。これらのカリキュラムは、オンライン(zoom)での参加も可能です[学期中は土日、長期休業中は平日を含めた日程を組んでいます。園・校内の通常業務の負担を考えたカリキュラムです]。

学校のリズムに合わせた大学院カリキュラム

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
年間行事と 学校行事の関連												
入学式	入学式											
中絶休												
夏休み												
体育祭 文化祭												
公開 研究会												
冬休み												
入試												
卒業式												

★教職大学院の大学教員を学校に呼んでも良いのでしょうか？

大学教員は数名のチームで各勤務園・校に訪問させていただきます。園・校内研究会の持ち方、実践研究会や授業研究会の個別相談から、授業実践の参観、校内研究会などの取り組みへの参加をさせていただきながら、院生の勤務園・校での園・校内研究、授業研究への取り組みを支えます。気軽にお声かけください！

★教職大学院に通って何がかわるのでしょうか？

変化が激しい時代かつ多様性に溢れた世界だからこそ、教師自身が課題を捉え検討(追求)していく、主体的・探究的な姿が求められています。教職大学院に通うことで、院生自身が悩みや課題に向き合いながら、実践の場、大学院の場、それぞれの検討を行き来する中で、自律的に問題に向き合う力や協働的に問題に向かう力を培います。修了後は、自分の学びを校内に広げ、学び合う教師集団に貢献できるミドルリーダーになることが期待されます。

詳しく
知りたい方は、
入試説明会に
お越し下さい！



福井大学連合教職大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科

学生募集

教職大学院 在籍院生の声



福井大学連合教職大学院
ミドルリーダー養成コース
2年 荒 通雄 (福井佼成幼稚園)

大学院に通い、自分自身の保育を客観的に捉え直すことで、肯定的にも見ることができるようになりました。特に、自分の保育実践内容を文章化することで視覚的に理解したり、セッションを通して対話することで、別の視点での考え方を知り、また評価されることで自信に繋がったりしたように感じます。

現在、月に2回の頻度で互いの保育内容や保育観、悩みなどを共有する場を作るなど、以前に比べて、保育現場で新しい事に積極的に挑戦するようになりました。



福井大学連合教職大学院
ミドルリーダー養成コース
2年 藤森 香織 (岡谷市立川岸小学校)

私が教職大学院で最初に参加したのは、ラウンドテーブルでした。校種や職種も異なれば、年齢や立場も異なる。そんな開かれた場所で自分のことを語り、相手の話に耳を傾ける。私にとって最初のラウンドテーブルは、これまでの自分を振り返る場、相手の実践から学ぶ場として、とても有意義な時間になりました。「対話」から多くの学びがあることを知りました。これは教室でも同じだと思います。友達と学ぶ機会。今日も私は、教室での対話を大切にしながら授業をしています。



福井大学連合教職大学院
学校改革マネジメントコース
2年 丸山 高弘 (鯖江市東陽中学校)

教員の定年が65歳に延び急に不安に襲われました。新たな知識を授けてもらおうと、教職大学院の門をたたきました。しかし、私の浅はかな目論見は外れました。講義形式の授業はほぼなく、さまざまな背景をもつ方々との意見交換が学びの中心になります。考えを整理したり、フィードバックを受けたりすることで、これまでの歩みを省察し、未来の教育を思い描きます。慣れてくるとこの話し合いが思いのほか楽しいのです。

みなさまにも新たな学びの形をお薦めしたいと思います。



福井大学連合教職大学院
ミドルリーダー養成コース
2年 横田 和也 (若狭高等学校)

月間カンファレンスやラウンドテーブルでは、校種・年齢・立場を超えた多様な方々と、お互いの実践や理論を基に、対話を通して、重層的な豊かな学びができます。「子どもの学びと教師の学びは相似形」という言葉通り、ここでの学びを生かしてホームルームや探究学習の時間に、実践と省察を基にした生徒同士の対話を行いました。また、ここで出会った先生方と異校種連携も実現しました。

実践ベースの研究だからこそ、生徒や先生方とチャレンジしながら日々を過ごしています。



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

教職大学院 Newsletter No. 172

2023. 6. 17 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp